感情表出文

東 弘 子[†]

本稿は、「まあ、嬉しい！」のような発話者が感情を思わず口にした「感情表出文」とはどのようなものか、感情主の制約のあり方と、統語的特徴から分析したものである。感情述語の人称制約は2種類のモードに関わる問題である。一つは、「述べ立てのモード」、もう一つは「感情表出のモード」である。前者のモードを持つ「述べ立て文」に生じる人称制約は語用論的なものであり、一人称感情主の場合が多いが、条件が整えば他の人称も可能である。一方、感情主が一人称以外ではあり得ないような人称制約を持つタイプの文がある。これを、感情表出のモードを持つ「感情表出文」と定義した。

その上で、感情表出文の統語的特徴について検討した結果、感情表出文は、述語が要求する感情主や感情の対象といった意味役割を統語的に分析的な方法では言語化しない、すなわち述語一語文であるという事実を明らかにした。

一語文では、言語文脈上に意味役割の値を参照することができないため、発話現場に依存して決めるしか方法がなく、感情主は発話現場の発話者、感情の対象は発話時の現場のできごとに自動的に決まる。よって、一語文は感情表出文のモードに適合する。一方、意味役割を言語化した文は、意味役割を発話現場に依存する必要がないため、発話現場に拘束されない。こうしたことから、感情表出文は述語一語文でなければならないと結論づけた。

キーワード：感情形容詞、文のモード、人称制約、一語文

Exclamatory Sentence

HIROKO AZUMA

This paper attempts to elucidate the nature of 'emotive sentences' like Maa, ureshii! 'Wow, how happy (I am)! in which the speaker involuntarily expresses his emotion, with special focus on the manifestation of experiencer subjects.

The grammatical person of the experiencer subject that an emotive predicate takes is constrained by the mood of the sentence in which it appears. On the one hand, if an emotive predicate appears in a sentence in 'the mood of the speaker's statement', the person of its subject is only pragmatically controlled. While the first person is most often found, other persons are also allowed in certain pragmatic contexts. On the other hand, the first person is the only possibility in sentences in 'the mood of involuntary expression of an emotion'.

Furthermore, several syntactic tests reveal that predicates of sentences in the latter mood do not syntactically manifest either the experiencer or the source of an emotion. In other words, emotive predicates solely constitute sentences in this particular grammatical mood.

Put differently, since neither the experiencer nor the source of an emotion is realized in a one-word emotive sentence, the values of these implied arguments must be inferred from the context of utterance of that sentence. Consequently, the experiencer

is automatically understood as the speaker, and the source as a concurring event in the same context.

Key Words: *emotive adjective, mood, person restriction, one word sentence*

1 まえがき

現代日本語で「うれしい」「悲しい」「淋しい」「羨ましい」などの感情形容詞を述語とする感情形容詞文には、現在形述語で文が終止した場合、平叙文の際、一人称感情主はよいが二人称、三人称感情主は不適切であるというような、人称の制約現象がある¹。

(1) { わたし/??あなた/?? 太郎 } はうれしい。

(2) { わたし/??あなた/?? 太郎 } は悲しい。

このとき、話し手が発話時に文をどのようなものと捉えて述べているかを表す「文のモード」²によって、感情形容詞の感情の主体（感情主）が、話し手である一人称でしかありえない場合と、やや不自然さはあるものの文脈によっては、二人称、三人称の感情主をとることが可能な場合がある（東 1997; 益岡 1997）。

(3)(4)のように、話し手の発話時の感情を直接的に表現している「感情表出のモード」を持つ「感情表出文」（（益岡 1991, 1997）で「情意表出型」とされる文の一部）では、感情主は一人称に限定される。「感情表出のモード」とは話し手が発話時の感情を「思わず口にした」ようなものであり、聞き手に対してその発話内容を伝えようというつもりはあってもなくてもよいものである³。

† 愛知県立大学 非常勤講師, Aichi Prefectural University

1 本稿で言う「人称」とは、「人称を表す専用のことば」のことではない。モードと関連する人称の制約にかかわるのは「話し手」か「聞き手」か「それ以外」という情報である。よって、普通名詞であろうと、固有名詞であろうと、ダイクシス専用の名詞であろうと、言語化されていないものであろうと、それがその文の発話された状況において話し手を指していれば一人称、聞き手を指していれば二人称、それ以外であれば三人称という扱いをする。

a. 太郎は仕事をしなさい。

b. アイちゃん、ご飯が食べたい。（幼児のアイちゃんの発言）

a. の「太郎」は二人称、b. の「アイちゃん」は一人称ということである。

2 文のモードとは、話し手が、文を述べる際、どのような「つもり」であるのかを示す概念である。文を聞き手に対してどのように伝えるか（例えば、命令、質問など）ということと共に、話し手が、発話内容に対してどのように判断しているか（例えば確信、推量、疑念など）も文のモードである。これを「モダリティ」と呼ぶこともあるが、本稿では、こういった文の述べ方に対する概念的区分を、「モード」と呼び、モードが具体的に言語化された要素を「モダリティ」と呼ぶ。例えば「明日は晴れるだろう。」という文では、発話内容に対して推量していることを聞き手に伝え述べるというモードを持つのが普通であり、「だろう」は推量を表すモダリティである。

3 感情表出文は、「まあ」「きゃっ」「ふう」など、発話者が自分の内面の感情を聞き手に伝達する意図なく発露する際に用いられる感嘆語と共起することが多いことから、聞き手への伝達を要しないものであることが分かる。

きゃっ、うれしい。

ふう、つらい。

一方、「さあ」「おい」「よお」など、聞き手に何らかの伝達を意図する感嘆語と共起した場合、感情形容詞述語文であっても、感情表出文にはならない。

さあ、悲しい。

おい、寂しい。

ただし、「まあ」などの感嘆語は感情表出文にとって必須ではない。

(3) まあ、うれしい。

(4) ええ憎い、憎らしい……人の与ひょうを〔木下順二『夕鶴』〕

一方、客観的に捉えた発話内容を述べ、聞き手に伝え述べるという「述べ立てのモード」((仁田 1991) 第 1, 2 章 参照) を持つ「述べ立て文」((益岡 1997) で「演述型」とされる文) における人称の制約は弱い。一般的には、(益岡 1997:(4)) で述べられている「人物の内的世界はその人物の私的領域であり、私的領域における事態の真偽を断定的に述べる権利はその人物に専属する。」という語用論の原則により、(5)(6) のような感情を表す形容詞 (益岡によれば「私的領域に属する事態を表現する代表的なもの」) を述語にする文において「あなた」「彼女」に関する事態の真偽を断定的に述べることは不適格である⁴。

(5) 夫が病気になったら { わたし/#あなた/#彼女 } はつらい。

(6) 海外出張は { わたし/#あなた/#彼女 } には楽しい。

しかし、このような語用論の原則は、文脈や文体的条件⁵などにより、その原則に反した発話でも許される場合があるのである。(7) は感情主を数量子化したもの、(8) は小説という文体的条件による。

(7) 海外出張は誰にでも楽しい。

(8) それをこさえるところを見ているのがいつも安吉にはたのしい。(中野重治『むらぎも』)

こういった人称制約のタイプを語用論的な人称の制約とする。

(東 1997) では、前者のように人称が限定されるタイプの人称制約を「必然的人称指定」、後者のように語用論的に限定される人称制約を「語用論的人称制限」と呼び区別した。(益岡 1997:(2)) でも情意表出型と演述型の人称制限の違いを、後者のみが日本語特有の現象と捉え、区別する必要を述べている。

しかし、従来の研究においては、その「感情表出 (情意表出) のモード」がどのようなものであるかということは明確に規定されておらず、また、どのように感情主が一人称に決定されるのかという人称決定のシステムも描かれてきていない⁶。

そこで、本稿では、以下の手順で「感情表出文」について明らかにしていく。

(I) 人称の制約が文のモードと関係して生じていることを確認する (2.1)

4 ここでは、語用論的に不適切であると考えられる文を、#でマークし、文法的に不適切であることをあらわす*とは区別して用いる。

5 文体的な条件によって人称制約が変わるというのは、小説などにおいて一般的な日常会話と語用論の原則が異なってくることから生じるものである。(金水 1989) 参照

6 (益岡 1997:(2)) でも「悲しいなあ。」のような「内面の状態を直接」に表出する文の場合、感情主が一人称に限られるのは当然のこと」とされている。

- (II) 感情表出文は、そのムードが述語主体を常に一人称に決定するものであることを定義づける。(2.2)
- (III) 感情表出文として機能し解釈されるためには一語文でなければならないことを主張する。(3)
- (IV) 感情表出文のムードの性質から (III) を導き出す。(4)

また、ここでは、人称制約を受ける部分を「ガ格（主格）」ではなく、「感情主」という意味役割を伴うもので扱う。感情形容詞述語は「感情主」と「感情の対象」（時にはそれは「感情を引き起こす原因」）を意味役割として必要とするが、人称の制約を受ける感情主は、ガ格とニ格とニトツテ格で表される可能性があるからである。

- (9) { 私/#彼 } は仕事楽しい。

(9) の「は」によって隠されている格を表わそうとすれば、三つの可能性があるが、どれも意味役割は感情主であり等価である。

- (10) a 私が仕事楽しいコト
- b 私に仕事楽しいコト
- c 私にとって仕事楽しいコト

また、(10)a におけるガ格「私が」「仕事」がで、人称の制約がかかるのは、感情主「私が」だけであり、意味役割が感情の対象である「仕事」には人称の制約がかかることはない。さらに、(9) の主題は、感情主であるため人称の制約があるが、(11) の主題「仕事は」には人称の制約はない。

- (11) 仕事は { 私/#あなた } は楽しい。

このようなことから、本稿では人称制約に関わる名詞句と述語との関係を意味役割で捉える。

2 感情主の人称制約と文のムード

先に、文のムードによって感情主の人称制約のあり方が違うことを指摘したが、ここでは、人称の制約現象が、文のムードと関係して生じているものであることを、形容詞句の統語的な位置付けから確認する。

まず、ムードを持たない統語的位置に形容詞句があるときには感情主の人称の制約がないことから、人称の制約は、ムードを伴うことによって生じることを示す。

さらに、述べ立て文と感情表出文における感情形容詞文の人称の制約現象を比較し、両者の人称制約は、全く性質の異なるものであることを主張する。

2.1 ムードを持たない統語的位置における感情主

感情形容詞を述語とする文に、常に感情主の人称制約があるかというところではない。(12)～(16)のような文には、感情主の人称の制約はない。これらには、文脈がどうであろうと、語用論的な制約もかからず、どの人称もあらわれ得る。

- (12) [[よし子にとってはうらやましい] 話] だ。
 (13) こどもの成長は [[親にとってうれしい] もの] だ。
 (14) [[あなたが悲しい] とき], 彼女なら慰めてくれるだろう。
 (15) [[私が苦しい] の] は、あなたのせいじゃない。

統語構造上、形容詞句は名詞句の内部に現れ、(南 1993) の階層で言えばB類に相当するところにあると言える。文のムードは南の階層のB類では担わない⁷。

- (16) *[[よし子はうらやましいだろう] 話] だ。
 (17) *[[太郎は花子の死が悲しくあるまい] の] は当然だ。

このように、文のムードと関わりのない統語的位置に、感情主と形容詞があるときには、感情形容詞文に人称制約は全くないのである。

一方、ムードを担う文末に形容詞があったり、モダリティがムードを指定している文では人称の制約が働く。

- (18) #よし子はその話がうらやましい。
 (19) #私はその話がうらやましいだろう。

よって、人称の制約現象は、明らかに、ムードとの関連のなかで生じている現象であることがわかる。

2.2 人称制約のある文と文のムード

感情形容詞文の感情主に人称の制約があると言っても、そのあり方は一元的ではなく、「語用論的人称制限」と「必然的人称指定」があることは、1. まえがきにも述べた。それぞれについて

7 (南 1993) では、様々な節の内部にどのような文の要素が含まれ得るかによって、文の階層構造を示した。代表的な例をあげておこう。

- ・ナガラ節 (平行継続): 程度副詞, ガ格以外の格, 動詞, ボイス, 尊敬などを含み得る→A類
 美佐子は [ちらちらテレビを見ながら A] 勉強した。
 * [美佐子がテレビを見ながら A], 良夫が勉強した。
- ・ノニ節: A類の要素, 場所の修飾語, 対比のハ, ガ格, ナイ, タなどを含み得る→B類
 [彼が [病院に行か A] ないのに B], 私だけ行くのはいやだ。
 * [彼は [病院に行か A] ないだろうのに B], 私だけ行くのはいやだ。
- ・カラ節: A類, B類の要素, 主題, マイ, タロウなどを含み得る→C類
 [彼は [病院に行く A] だろうから C], 私も準備しておこう。
 題述関係はC類の階層に属し、ここにおいて主題とムードが呼応している。

てムードと人称の制約との関係を確認し、その上で、感情表出のムードを定義しよう。

2.2.1 語用論的人称制限—述べ立てのムードの文

先述の(益岡 1997)において明らかにされたように、述べ立て文において、話者以外の感情(私的領域に属する事象)を、話者が断定的に述べることは、語用論的に避けられるべきことである。しかし、その原則が、文体、文脈的条件によって、適用されていない例を見てみよう。

- (20) シルレルの名を聞くことがもう僕には辛い。(小林秀雄『ドストエフスキーの生活』)
- (21) それをこさえるところを見ているのがいつも安吉にはたのしい。((8)再掲)
- (22) 榊山は嬉しかった。(檀一雄『花筐』)
- (23) 「私、自殺まで考えたのよ。どう責任とってくれるの。」
「わかった。あなたはつらかった。それはわかったから、今日のところは引き取ってくれ。」

(20)~(22)は小説からの引用であり、小説という文体では自然な表現であるが、一人称感情主の(20)以外、日常的な対話の場でこのような文は不自然である。また、(23)は話し手が聞き手に抗議された内容をまとめて、過去のコトガラとして強引に提示するような場面で用いられている。どれも、述べ立てのムードの文である。

また、(益岡 1997)の原則とは別に、三人称の感情主がもっとも適切だが、文体、文脈的条件によって、一人称、二人称でも容認可能になる例もある⁸。これらは、推し量り形式のモダリティが後接したものである。

- (24) {#わたし/#あなた/太郎}はうれしいだろう
- (25) {#わたし/#あなた/太郎}は連敗が悔しいにちがいない。

(24)(25)は、一、二人称の感情主では、普通不自然である。しかし、条件節などによって仮定の出来事であるという文脈的意味があれば、適切になるような性質のものである。

- (26) 僕が彼女と別れたら、あなたはうれしいだろう。
- (27) 今はまだ自分の実力に自信がない。連敗しても仕方ないと思う。しかし、将来羽生善治氏のような栄光を手に入れたとして、その後名もない人に連敗などしたら……そんなことになったら、わたしは連敗が悔しいにちがいない。

⁸ 本稿の立場とは異なり、感情形容詞述語が一人称の感情主をとることを基本と考えてきたような研究においては、三人称をとる文は「人称制限解除」として、先の2.1の条件と同等に扱われた。しかし、どの人称も問題なくとれる2.1のものと、三人称をとりやすいこれらとは、当然別に扱うべきである。

これら人称制約が生じることのある感情主は、どれも文の主題であり、(南 1993)の階層ではムードと呼応する階層(C類)のものである(註7参照)。そして、(20)~(27)の例はみな、述べ立て文である。

述べ立てのムードを持つ文の語用論的な人称の制約のあり方は、(仁田 1991)(第二章)に詳しいが、そこでは次のような例があげられている⁹。(例とその判定は(仁田 1991(: 83—93))より。ただし、仁田論文において語用論的な人称制約で不適切な文についても用いられている*を、ここでは#に書き換えた。)

- (28) {私/#あなた}は母が恋しい。
- (29) ?ほら、君、転んだよ。
- (30) #僕は彼を殴っただろう。
- (31) #君は頭が痛い{だろう/らしい/かもしれない}。

感情形容詞文の、文体、文脈的条件で変化する人称の制約も、こういった述べ立て文における人称制限そのものである。

このように、文体、文脈的条件によって人称の制約の変化する感情形容詞文の人称の制約は、感情形容詞文に特有の現象ではなく、述べ立て文全体に存在する、語用論的な現象なのである。

2.2.2 必然的人称指定—感情表出のムードの文

次に、常に感情主が一人称に決定されるような文をあげよう。

- (32) 嬉しい。ねえ、しばらくでいいから、いっしょに連れて歩いて。(丸谷オ一『笹まくら』)
- (33) ええ憎い、憎らしい……人の与ひょうを((4)再掲)
- (34) 「悲しいわ。」駒子はひとりごとのように呟いて(後略)(川端康成『雪国』)

これらの感情形容詞文の感情主は、言語化されていないが、話し手に決定している。これらの文が担っているのが感情表出のムードであり、「感情表出文」は、次のように定義されるであろう。

- (35) 発話者の発話時に生じる感情的状態を、客観的判断過程を通さず、直接的に表現した文

しかしここで問題になるのは、「直接的に表現」することの意味である。先行の研究において感情表出は以下のように定義されているが、その議論をたどり、扱われている例文を見ても、「表出」とすることと「述べ立てる」とこととの違いは鮮明でない。「表現時の感情」を単に述べるこ

⁹ 仁田はこれらの人称を「ガ格」としているが、「主題の人称制約」とすべきであろう((東 1997), 本稿「まえがき」参照)

と「表出」することの本質的な違いについては説明されてきていないのである。

(寺村 1984(:349)):話し手のそのときの気持の直接的な表出

(益岡 1991(:80-81))

- 対話文の「情意表出型」:表現時において、話し手の内面に存する感情・感覚や意志の内容を情報として聞き手に伝える働きを持つ。
- 非対話文の「情意表出型」:表現主体の内面にある感情・感覚や意思を表すもの

(山岡 1997):発話時の話者の感情を直接表出する文。

述べ立てと表出とは、以下のような点で、明らかに異なる。

「述べ立て」文は、発話者が、何について述べるのか(文の主題)を多くの候補の中から選び出し、それについて述べるものである。述べられるものが「発話者自身」であり、また、述べる内容が「発話者の感情」であれば、一人称感情主についてその感情を述べる文になる。それは、三人称主題についての述べ立て文とムード的には何ら変わらない。「述べ立て」のムードの文においては、基本的にどんな人称も主題にできる¹⁰

(36) 私は試験がづらい。

(37) 太郎は試験がづらい。

(38) この自動車は古い。

一方「表出」は、ムードそのものが、発話者の感情を述べることを含み込んでおり、常に、感情主は発話者、すなわち一人称に決定している。述べ立て文のように、何について述べるのかの選択の余地はない。

(39) つらい!(感情主=発話者(一人称))

こうしたことから、ここで「表出」というものを次のように定義する。

(40) 表出文:その文のムードが述語主体を常に一人称に決定するもの¹¹

感情を表す述語としては、形容詞だけでなく感情動詞もある。しかし感情や感覚、心理を表す述語であっても、動詞文では多くのものが(41)(42)のように感嘆語と共に発話者の感情を表出する文にはならない。(44)(45)のような一部の動詞のみ¹²、感情表出のムードをもつ

10 (37) は、主題が小説の登場人物であるなど何らかの条件で発話者が心理的共感を持たなければ述べるに値しない内容ではあるが。

11 同じ表出のムードである「意志表出」でも同様に、ムードにより動作主が決定している。

よし、手術をしよう。(動作主=発話者(一人称))

感情表出文と意志表出文の関係は次のようになる。

感情表出文:述語主体が感情主(例:うれしい!)

意志表出文:述語主体が動作主(例:明日こそ宿題をやろう!)

12 註14にも引用したように、多くの動詞は、話し手自身の感情を直接表出するのには用いられない。

ことができる¹³.

- (41) ああ, { 喜ぶ/喜んでいる }. (×感情表出)
- (42) まあ, { 悲しむ/悲しんでいる }. (×感情表出)
- (43) #私は合格を { 喜ぶ/喜んでいる }. (×感情表出)¹⁴
- (44) ああ, 腹が立つ. (感情表出)
- (45) まったく, イライラする. (感情表出)

感情表出文における人称制約は, 感情形容詞文と, 一部の感情動詞に特有の現象なのである。以上, 本章で論じた点をまとめると以下ようになる。

- (46) 人称の制約のあり方は, 形容詞句 (一部動詞句) の統語構造上の位置と深く関係している。

{	ムードに関係ない形容詞句 (南の B 類) : 人称制約なし	{	述べ立てのムードの文 : 一般的な語用論的原則から生じる人称制約 ((24)(25))
	ムードに関係ある形容詞句 (南の C 類)		感情表出のムードの文 : ムードによって人称が決定 感情形容詞と一部の感情動詞に特有の現象 ((32)~(34)(39))

次章ではその感情表出文について, 統語的特徴を明らかにする。

13 感情動詞の表出文については山岡 1997 参照。ただし山岡の言う「感情表出」には「述べ立て文」も含まれている。山岡の示すものの中で本稿の定義に一致する感情動詞は (45)(46) のほか, 「頭に来る」「困る」「むかつく」「ドキドキする」「わくわくする」など, 聞き手不在で使用できる感嘆語「ああ」などと共起できる動詞である。山岡の挙げる「疑う」「照れる」「気が晴れる」「憎む」などは表出文にはならない。

14 (寺村 1982(:143)) には「動詞による感情表現のほうが」形容詞より「より客観的, 物語り文的」とあり, 「動詞表現は, 話し手自身の発話時の気持ちを直接的に表出する表現ではない」としている。そのため, 述べ立て文としての語用論的な人称の制約となるが, この場合, 二人称だけでなく一人称も述べにくい。一人称の感情であれば, 動詞で述べるよりも形容詞で述べるほうが語用論的に適切だからである。

{#わたし/#あなた/太郎} は合格をよろこんでいる。

{#わたし/#あなた/太郎} は別れを悲しむ。

3 感情表出文の統語的特徴

3.1 表出文であるための条件 (1)– 述語の形態と条件節

感情表出が、発話時の感情を表出するということをふまえれば、まず、述語が過去形であったり¹⁵、述べ立てのムードをあらわすモダリティが文末にあれば、表出文でないことは明らかである。

- (47) 私は淋しかった。(夏目漱石『こころ』)
- (48) 無性に悲しかった。(新田次郎『孤高の人』)
- (49) *ああ、{うれしかった/哀しかった}.
- (50) あなたも辛いだろうが、私も辛いのだよ。(田辺聖子『新源氏物語』)

また、現在形であっても、(51)(52)のように否定形では感情表出のムードは持たない。否定というのはそもそも、肯定される事態を想定したその上で、否定するという形式である。感情表出のムードは前述したように「発話時の一瞬に生じた感情的状態を客観的判断過程を通さず直接的に表現」するものであるから、一旦想定した事態を否定するというような判断過程が入りこむ余地はなく、よって、否定形は感情表出のムードに馴染まないのである¹⁶。

- (51) *まあ、嬉しくない！
- (52) *ああ、淋しくない！

よって、否定形は述べ立てのムードになり、人称の制約も必然的なものではなくなる。

- (53) 妹の店で飲んでも {わたし/#あなた/#太郎} は楽しくない。
- (54) 「お万阿、そなたのお喋りを聞いていると〔中略〕これはおもしろいわい」
「……」と、お万阿にはちっとも面白くない。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

また、条件節が前接した場合も、発話時の感情表出のムードにはならない。条件節で提示した内容が発生した時においての感情を述べることになるからである。

- (55) もし君が来てくれたら嬉しい。(福永武彦『花の草』)
- (56) スキーで雨に降られるとつらい。

本節で確認した感情表出文になるための条件は以下の通りである。

15 ただし、「ああ、{怖かった/おいしかった/つらかった}。」のように、過去形であっても感情表出文となるものもある。これらは感情を引き起こす原因が消失すればその感情も消失するようなタイプのもので、原因が消失した直後の発話としてこのような過去形の表出文が成立するようである。詳細は別稿に譲る。

16 当然の事ながら、「つまらない」「やりきれない」など、固定化した表現は、否定形ではない。

<事実1>

- (I) 述語が現在形で、並べ立てを表すモダリティが付加しない
- (II) 述語が肯定形
- (III) 条件節が前後しない

3.2 表出文であるための条件(2)―無題文

3.1で確認した事実は、感情表出文となるための必要条件であり、それだけでは表出文の特徴を記述したことにはならない。本節ではさらに感情表出文の統語的特徴を示す。

(益岡 1997(:2)) には、情意表出型の文の説明として次のような記述がある。

- (4) 悲しいなあ。
このような場合、感情主は一人称に限られるので、一般に省略される。
- (5) ?僕は悲しいなあ。

益岡は、例(5)に「?」を付しているが、これが表出文なのか述べ立て文なのか、明確には示されていない。この文が述べ立て文であれば、「僕」について述べる述べ立て文であり、不自然さはない。しかし、例文(4)の「悲しいなあ。」が益岡の言うように「感情主が一人称に限られる」ものであるのなら、こちらは感情表出文である。(4)と同じ表出文として扱うのならば、「僕は悲しいなあ。」という文は表出文ではありえないので、「?」ではなく「*」でなければならない。なぜなら、主題文は「主題について何かを述べる」文であり、主題は述べ立て文で用いられるものだからである。

感情表出文「悲しいなあ。」と述べ立て文「僕は悲しいなあ。」は、ムードの異なる文であることから、益岡のように「一般に省略される」と記述するのは誤りである。

先行研究において「感情表出文」として提示された文で、客観的な判断過程を含まず「直接表出」した感情主の人称が一人称に決定しているのは次のようなものであり、どれも無題文である。

- (57) さびしいな。((寺村 1984) より)
- (58) 哀しいね。((益岡 1991) より)
- (59) ああ、腹が立つ。((山岡 1997) より)

しかし、筆者の研究も含め、従来のいくつかの研究において「感情表出文」とされた例の中には、主題を持ち、発話時の発話者の感情を表出したものとは思われないものがある。

- (60) ぼくは蛇が怖い。((寺村 1973) より)
- (61) 私はすしが食べたい。(同上)
- (62) いや、野暮なことを言って、わしは恥ずかしい。(木山捷平『長春五馬路』)((東 1997) より)

それぞれの主題に話者以外の感情主をあてると、確かに、不自然な文にはなる。しかし、これらは、先の 3.2 で確認した語用論的な制約によるものである。それらを述べてもよいようなコンテキストさえあれば、決して非文ではない。

- (63) 拓也は蛇が怖い。慎吾は雷が怖い。正広は暗闇が怖い。
まったく、ここには怖がりばかりいるなあ。

また、感情主以外の主題があっても同様に述べ立て文である¹⁷。

- (64) 人間のことを想うのは哀しい。(大仏次郎『帰京』)
(65) ゆらりゆらり輪を描いて浮いてゆくむらさき色のけむりはうれしい。(林芙美子『放浪記』)
(66) この店のコース料理にはデザートが二品ついてくるのがうれしい。
(67) バスは時間が不定期で困るよ。(赤川次郎『女社長に乾杯』)((山岡 1997)より)

これらの文における感情主は、必ずしも発話者とは特定できない、generic な解釈がなされる文である。「誰にとってもその感情が引き起こされるような状態」であることを述べている文なのである¹⁸。

また、(64)~(67) には「~にとって」という形式で、感情主を挿入することができるが、感情表出文には挿入できない。

- (68) 人間のことを想うのは{私/彼女}にとって哀しい。
(69) *わあ、私にとって哀しい!

よって、(68) のように感情主が挿入できる (64)~(67) の文は述べ立て文であるといえる。

もちろん、(70)(71) のように文脈上、表現されていない感情主が一人称であると考えたほうが妥当なものもあるが、これらも状態を叙述する述べ立て文であることには変りない。同様のことは属性形容詞文 ((72)) にもある。

- (70) 今日は母の手蹟を見るのがはなはだ嬉しい。(夏目漱石『三四郎』)
(71) (八月×日)

よそへ行って外のカフェでも探してみようかと思う日もある。まるでア

17 (寺村 1982(:151-152)) にも、以下のような記述がある。

感情的な形容詞を述語とする感情表出の文、

XハYガ(形容詞)

の、X(感情主)が文の背後にかくれ、Y、つまり形容詞で表される感情の対象が文の主題となって、Yハ(形容詞)となると、それは、「一般にYがこれこれの感情を引き起こすような性格を持ったものだ」という、品定め文の一種となる。

18 (寺村 1982) にも、「それ(=感情主の名詞句：引用者補)が文中になければ、その品定めが「一般に、誰にとっても」そうだという意味に解釈される」とある。

ヘンでも吸っているように、ずるずるとこの仕事に溺れて行く事が悲しい。

(林芙美子『放浪記』)

(72) 私は暗記が苦手だ。特に英単語を覚えるのは難しい。

また、本来は主題があるが、文脈上省略されて隠れている文の場合も、やはり感情表出文にはならない。次の例で、下線の文はそれぞれ「私は」「加恵は」という主題が省略されており、述べて文である。

(73) 本当にいやなはずらね。嘘と分かっているでも腹が立つわ。(赤川次郎『女社長に乾杯』)((山岡 1997) より)

(74) 加恵はそれを娘を喪った悲しみが軀にも響くのだと思っていた。目を押え、拭いながら、加恵は前々通りに家の中の雑事を片付けていた。しかし、夜になるとしみじみと娘が恋しかった。於継はそれを身を切り裂きたいようであったといったが、同じ悲しみでも加恵の性格ではそういう烈しさよりも全身の力が脱け落ちている。苛立たいほど虚しくて、どうすることもできないほど淋しい。加恵は自分の脛にじっとりと滲み出るのは、涙ではなくて血なのではないかと思っていた。(有吉佐和子『華岡青州の妻』)

以上の観察から、次のことが言える。

<事実 2>

感情表出文は、主題を持たない。¹⁹

3.3 述語のみの文(統語的に未分化の文)

では、3.1 の条件を満たし、無題文であれば、感情表出文なのであろうか。

元来感情形容詞文は、感情の対象または感情主を取り、形容詞句を作るものである。

(75) この授業がつまらない(のは先生のせいだ。)

(感情の対象)

(76) 私が悲しい(ことをみんなは知らない。)

(感情主)

(77) 彼にとって 社長との再会がうれしい(はずはない。)

(感情主) (感情の対象)

ところが、先の感情表出文の例((57)~(58))は、無題文であるだけでなく、そのどちらをも

19 同じ表出文である意志表出文も同様の特徴を持つ。意志表出文において「は」は常に「対比」の意味を持つ。((東 1997) 参照)

言語化していない²⁰。(例文再掲)

(57) さびしいな.

(58) 哀しいね.

(59) ああ、腹が立つ.

このように感情主も感情の対象も言語化しない文が感情表出文となる。意味役割からすれば、感情形容詞文は、「感情主」「感情の対象」をとる可能性がある。しかし、それらの意味役割を助詞を伴って言語化した文は、感情表出文にならないのである。

感情主や感情の対象を言語化した例において、(40)の定義のように、感情主が一人称に決定しているかどうか確認してみよう。

(78) a わたしが淋しい.

b わたし、淋しい.

(78)は、感情主を言語化した例である。a bそれぞれについて、感情主が発話者に決定しているか否か確認しよう。

次のような文脈で、感情主を訊ねる質問文の答えとしては、aを用いるのが適切であり、bは不適切である。

(79) 問：「一体誰が淋しいの？」

答：a「わたしが淋しいの。」

b#「わたし、淋しいの。」

このことは、(79) aは、感情主が決定していない際に用いる形式で、bは感情主が決定している形式であることを示している。aは感情主として「わたし」以外の他の候補もあり得る形式だからこそ、この文脈で自然なのである。bは、このような文脈には現れない。それ以前の文脈とは無関係に、唐突に発話されるものである。すなわち、aのように感情主がガ格で表された文は感情表出文ではなく、bのように無助詞の場合、感情主が一人称に決定している感情表出文であると言えるであろう。

また、(80)~(83)は感情の対象を言語化したものである。それぞれ、aは助詞を用いて感情の対象をあらわし、bは無助詞である。これらにおいて、感情主の人称が、発話者に決定しているかどうかを確認しよう。

(80) a 芝漬けが食べたい.

b 芝漬け、食べたい.

(81) a この授業がおもしろい.

20 「腹が立つ」は、「立つ」という動詞が感情述語で対象に「腹」を取っているわけではない。

- b この授業, おもしろい.
 (82) a 先生と会えたから嬉しい.
 b 先生と会えた, 嬉しい.
 (83) a 卒業できなくてつらい.
 b 卒業できない, つらい.

次のような文脈での間の答えとしては, a を用いるのが適切であり, b は不適切である.

- (84) 問: 「{あなた/あなたの妹}は一体何が食べたいの?」
 答: a 「芝漬けが食べたい.」
 答: b # 「芝漬け, 食べたい.」
 (85) 問: 「{あなた/あなたの妹}はなぜ嬉しいの?」
 答: a 「先生と会えたから嬉しい.」
 答: b # 「先生と会えた, 嬉しい.」

a の形式は, それぞれの間で示された主題を受けて, 答えているものである. 省略されている主題を示せば, それぞれ次のようになる.

- (86) {私/私の妹}は芝漬けが食べたい.
 (86) {私/私の妹}は先生と会えたから嬉しい.

ところがbの形式は問に対する答として不自然である. もしこのような会話の流れの中でbのように発話したとすれば, 間を無視した独白という印象を与える. bの形式では間で提示された主題を受けることができず, 感情主は発話者に決定しているのである. すなわち, (80)~(83)のbは, 表出文ということになる.

しかし, 無助詞であれば常に表出のムードを担うわけでもない. 第三者が引用した例を見てみよう.

- (88) 「芝漬け食べたいって.」
 「誰が?」
 「太郎が.」
 (89) 「わたし, 淋しいって」
 「何が?」
 「彼がいなくなったことが.」

こうした会話が成立することから, 引用された「芝漬け, 食べたい」「わたし, 淋しい」の感情主は一人称と限らず, 表出文でないことが分かる. (88)のように感情の対象に助詞を添え

ないものは「って」という形式で間接引用されれば、表出文ではなく²¹、(89)のように感情主に助詞を添えないものは直接引用になり、「わたし」は発話者ではない。

このことから、感情主や感情の対象を無助詞で表すことは、感情表出文であるための必要条件であるが、十分条件ではないことが分かる。すなわち、表出文で感情の対象を言語化しようとするのであれば、助詞を伴うことはできないということである²²。

こうしたことから、次のことが言える。

<事実3>

感情表出文では、意味役割として存在する感情主や感情の対象を格を伴った形で表現することはできない。

3.4 本章のまとめ

以上、本章で見てきた感情表出文に関する事実を確認すると次のようになる。

- (I) 現在形、肯定形述語であり、並べ立てのモダリティや条件節が付加されない。
- (II) 無題文である。
- (III) 意味役割を格を伴う形でとらない。

上記より考察すると、感情表出文では、感情主や感情の対象を、統語的に分析的な方法では言語化しないと言える。「まあ、わたし、うれしい。」というのは、表記上読点をふればこれだけ全体で一文であるが、「まあ、わたし。うれしい。」と句点をふった三つの文と何ら変わりはない。すなわち、感情表出文は、感情主や感情の対象をとらない一語文であると言える²³。このことから、次のような仮説を立てる。

<仮説>

- (I) 感情表出文では、感情主や、感情の対象を言語化しない。すなわち、述語のみの一語文でなければならない。
- (II) 仮に言語化するとしても、格関係や、題述関係など、統語的に分析的な方法をとってはいけない。

発話時の感情を直接表出する感情表出文がなぜ、述語一語文でなければならないのか、この仮説を次章において検証する。

21 表出文であることを明らかにするために、感動詞を添えると、間接引用にはならず直接引用になる。感情主は当然引用元の発話現場における発話者である。

「ああ芝濱け食べたい」って。

22 動詞文でも同様である。「僕が子供にイライラする。」「ああ、イライラする！(表出文)」

23 一文でこのような特徴を満たしていても、文脈上、感情主や感情が「省略」された場合、感情表出文でない。「先生、今回の受賞のお気持ちを聞かせて下さい。」「(わたしは)(受賞が)とても嬉しいわ。」

4 感情表出文はなぜ一語文か

前章では、述語のみの文が、感情表出のムードを持つことができるという事実を確認した。本章では、表出文はなぜ一語文でなければならないのかを述べる。

4.1 一語文の意味決定

まず、本来とるべき意味役割を持つのにそれを言語化せず、一語文として表現される文が、どのように意味決定されるのか、その仕組みを考察してみよう。

一語文の用法に関しては(尾上 1998)の研究があり、特に名詞一語文について詳しい分析がなされている。その中で、発話が名詞一語であることを本質的に必要としているのは「存在一語文」と名付けられたものだけであるとしている²⁴。「存在一語文」とは、現場における、遭遇、発見の叫びとしての一語文であり、次のように分類されている²⁵。

- 存在承認：遭遇対象の名前を叫ぶことによって遭遇の際の急激な心的経験
そのことを語るもの
「とら！」(虎と遭遇した驚嘆を驚きとして発話する)
- 存在希求：希求対象の名前を叫ぶことで希求感情そのものを結果的に表現
するもの
「水！」(砂漠で必死に水を求める)

これら存在一語文は、「述べないことによってこそ文であるという特殊な文表現(尾上 1998(:907))」であるが、なぜそれらが驚嘆や希求を表す文になるのかということについて、尾上では次のように説明している。

(前略) A <存在承認> 一語文と B <存在希求> 一語文は、「それがある」こと、「それを求める」ことを、「それ」の名を叫ぶことによって表現してしまう発話である。(中略) イマ・ココにあるものが急激に話し手の心を覆ってしまったとき、その心的経験を何らかにことばに発散しようとするなら話し手はそのものの名を叫ぶしかない。これが A 1《発見・驚嘆》一語文である。また、イマ・ココにないものが話し手の心をイマ・ココで切実に充満するとき、その心的経験をことばにするなら、そのものの名を叫ぶ以外にない。これが B《希求》一語文にほかならない。(中略) 対象の名を呼ぶことによるのみ果たされる表現とは、言ってしまうえばイマ・ココの圧倒的な存在の承認である。(後略)

すなわちこれらの一語文は、発話現場(イマ・ココ)との関係が義務的であるということである。そして、発話現場の状況と、「叫ばれた名詞」との関係によって、その発話の解釈は決定する。

では、本稿で扱っている感情表出文としての一語文はどのような原理で表出文になるのだろうか。

24 他にも名詞一語文はあるが、それらは主述的に展開されうる文形式の一部が省略されて一語文になったものであるとされている。

25 (尾上 1998)では、存在承認、存在希求それぞれがさらに、喚体的なものと伝達的なものとに下位分類されている。

感情表出文は、名詞一語文ではなく述語一語文である²⁶。しかし、前章で述べたように、一語文が感情主や感情の対象を言語化しないからと言って、感情主や感情の対象そのものが存在しないわけではない。次の例では、感情主は発話者、感情の対象は()内に記したものであろう。

- (90) わあ、おもしろい。(発話者の眼前の出来事)
- (91) ふう、淋しい。(発話者の心中に想起されている出来事)
- (92) はあ、つらい。(発話者にふりかかっている事実)
- (93) ううん、食べたい。(発話者の眼前のもの)

これら感情主、感情の対象という意味役割に相当するものは、発話現場に依存して(もしくは拘束されて)解釈が決定している。

その仕組みは以下のようなものである。一語文は、感情主、感情の対象といったものが統語的に存在しない。故に、それら意味役割に対し、言語文脈上の要素を参照して値を振り当てることができない。そこで、発話現場に存在する感情主(発話者)、感情の対象(目の出来事など)に、一義的に決定するのである。

図示すると、(90)のような一語文が発話されたとき、発話と発話現場の関係は、図1のようである。

図1 発話と発話現場の関係

述語一語文の意味決定の仕組みは以下のようにまとめられる。

- (94) 述語一語文では、述語の要求する意味役割は発話現場から探し出される。

一語文であることで、発話現場の感情主(発話者)、発話現場の感情の対象(ものや出来事)に自動的に決定するのである。

このように述語一語文も発話現場と切り離せないものである。分析的に表現しないことで、発話現場とのつながりを絶対的なものとしているのである。

²⁶ 繰り返しになるが、尾上の扱った「存在一語文」と同様、感情表出文は文中の他の要素があってはならないものである。省略されているのではない。

4.2 一語文と文のムード

述語一語文では、述語の要求する意味役割に相当するものを言語文脈上認定できないため、発話現場から探し出し決定することを前節で確認した。それは、感情表出文が「発話時の発話者の感情」を表出するものでなければならないことに適合する。²⁷

一方、前章で立てた仮説を検証するために、意味役割を分析的に言語化した表現が、表出文になれないことを示そう。

助詞を用いて分析的に表現するとき、言語化される感情主や感情の対象は、統語的に存在するので、発話現場のものである必要はない。

(98) 彼には出張中のK先生の授業がおもしろい。

(99) 亡き祖父は息子に先立たれてつらかった。

このように発話現場に縛られない表現が可能である。仮に発話現場のものを同様に言語化していたとしても、発話現場との直接的な関係は絶たれ、言語表現として客観的に対象化される。

(100) 私には今受けているこの授業がおもしろい。

(101) 僕は息子に先立たれてつらい。

「私」や「授業」が、発話現場のものであったとしても、助詞で関係づけている以上、言語化された世界での関係を示すだけであり、現実世界とのマッチングは表現された名詞が行うので、発話現場への直接的な値の参照は必要ないのである。意味役割は、言語化した世界で割り当てられる。言語表現という閉じた世界の中で、何が何に対してどうである、どうするなど、述語が要求する意味を満たす形で、関係づけているのである。これが一般的な文の述べ方で、「述べ立て文」であることは言うまでもない。

こうした分析的な表現では、場面の状況や発話者との直接的な結びつきがないため、感情主の制約も、一、二、三人称のいずれからも選ぶ可能性がある中で、語用論の原則により一人称が選択されるということになるのである。

このような事実は、(山田 1908, 1936)の「喚体の文」が「非分解的である」(山田 1908)²⁸ということと一致する。山田の理論を現代日本語研究に継承するために再解釈したものとして、(尾上 1986; 堀川 1996)などがあるが、両者とも、喚体と述体を区別する要因の一つとして「現

27 述語一語文であれば、常に「感情表出」になるわけではない。場の状況や述語の意味に応じて、様々なムードが出現する可能性がある。が、基本的に、テンスの分化のない述語一語文は、発話現場に存在する世界に直接意味役割を求めた発話になるのである。例えば「壊す。」という発話は、発話現場の2つの動作主(話し手と聞き手)のどちらをとるかによって、2種類の文のムードを持つ可能性がある。

「壊す。」 動作主→話し手→意志表出のムードになる
→聞き手→命令のムードになる

28 (山田 1908(:1209))には以下のようにある(引用者により漢字を新字体に改めた)。「元来喚体句は直感的のものにして、他に之を伝ふるに又直感を以てするものにして決して解せしむる目的にあらず。感ぜしめむが目的なり。感動は直感的にして非分解的のものなり。然るに之を解釈すといふ直に了解作用の乗ずる所となりて、こゝに分離思考によらざるべからず、この故に一旦解釈すればすでに喚体文にあらず。」

場性」をあげている。喚体の文は現場性をもち、述体の文は現場からの独立性が特徴的であるという。分析的でない感情表出の表現は、現場とのつながりにおいてしか成立しえない、まさしく喚体の文と言えるのかも知れない²⁹。以上のことから、次のような結論を出す。

<結論>

一語文は、意味役割を発話現場から直接的に決定しなければならず、そのことと発話時、発話者、発話現場に拘束された感情表出のモードは適合する。

一方、統語的に分析的な文は、統語的に表現された要素の存在から発話現場には拘束されないため、発話時、発話者の感情のみを表す感情表出文には不適切である。

よって、感情表出文は述語一語文でなければならない。

5 むすび

本稿での主張を順次まとめると、以下のようになる。

- (I) 統語構造上の位置から感情形容詞文の人称の制約をみると、文のモードに関係のある階層に人称の制約があらわれる。
- (II) 感情表出のモードの文においては、感情主が一人称に限定され、他の感情主が選択される余地はない。
- (III) 感情表出文は、発話現場から直接意味役割を捜し出す、述語一語文でなければならない。

このように本稿では、感情表出文を述べ立て文から分ける明確な定義づけをしたことにより、表出文が述語一語文であるという統語的特徴を示すことができた。また、なぜ、感情表出文が一語文という統語的特徴を持つのかについて、一語文の意味役割決定のシステムを描くことにより、表出のモードとの意味の適合性があることを明らかにした。

<参考資料出典>

中村 明 1979『感情表現辞典』六興出版
CD-ROM版新潮文庫の100冊 新潮社版

29 ただし(尾上 1986)では喚体の文の特徴として「ことばになるのは遭遇対象、希求対象のみで、心的経験・心的行為の面はことばにならない(:576)」とあるので「ああ、うれしい」は、述体と考えられているようである。また、(尾上 1998)(注2)において「あつい!」なども述体の側に位置づけると述べている。(山田 1908)でも、現代語で「ああうれしい」にあたる「あな、うれし。」は「感覚の言語的発表」であり、喚体には近いがあくまでも述体の文であると分類されている。

参考文献

- 東弘子 (1997). “日本語における人称とムードの一致.” 『南山国文論集』 21 (南山大学国語学国文学会) pp. 7-25.
- 堀川智也 (1996). “現代語における喚体的表現について.” 『名古屋大学日本語・日本文化論集』 4, pp. 27-40.
- 金水敏 (1989). “「報告」についての覚書.” 『日本語のモダリティ』 (くろしお出版) pp. 121-129.
- 益岡隆志 (1991). 『モダリティの文法』 (くろしお出版) .
- 益岡隆志 (1997). “表現の主観性.” 『視点と言語行動』 (くろしお出版) pp. 1-11.
- 南不二男 (1993). 『現代日本語文法の輪郭』 (大修館書店) .
- 仁田義雄 (1991). 『日本語のモダリティと人称』 (ひつじ書房) .
- 尾上圭介 (1986). “感嘆文と希求・命令文—喚体・述体概念の有効性—.” 『松村明教授古稀記念国語研究論集』 (明治書院) pp. 555-582.
- 尾上圭介 (1998). “一語文の用法—イマ・ココを離れない文の検討のために—.” 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 (汲古書院) pp. 888-908.
- 寺村秀夫 (1973). “感情表現のシンタクス.” 『月刊言語』 2-2, 『寺村秀夫論文集』 (1993 くろしお出版) , 3-16 再掲 pp. 98-106.
- 寺村秀夫 (1982). 『日本語のシンタクスと意味』 (くろしお出版) .
- 寺村秀夫 (1984). 『日本語のシンタクスと意味』 (くろしお出版) .
- 山田孝雄 (1908). 『日本文法論』 (宝文館出版) .
- 山田孝雄 (1936). 『日本文法学概論』 (宝文館出版) .
- 山岡政紀 (1997). “感情表出動詞の状態性—感情形容詞との違いなどを中心に.” 第 10 回日本語文法談話会発表資料.

略歴

東 弘子: 1997 年名古屋大学大学院博士課程後期満期退学, 博士 (文学). 以後, 大学非常勤講師として国語学, 言語学, 日本語などを担当. 日本語学 (主に文法) 専門. 言語処理学会, 国語学会, 関西言語学会会員.

(1997 年 10 月 8 日 受付)

(1998 年 1 月 27 日 再受付)

(1998 年 12 月 24 日 採録)